

「死の人工呼吸」 著者 川田弥一郎(かわだやいちろう)

講談社文庫(1997. 6. 15発行)524円(311p) 紹介者：榎本博康

[紹介]

全6編の短編集だが、これが嬉しいことに全てランニング大会が絡んでいる。名古屋の総合病院に勤める20代半ばの2人の看護婦、いつも上位争いに絡む川本政美と、ファンラン派の早田菜月が、殺人事件を解決していくという、探偵ものである。

①「炎天のランナー」は日射病、②「死の人工呼吸」は咽喉異物、③「眠りの恐怖」は睡眠時無呼吸症候群、④「墜落」はニトログリセリン、⑤「謎の食中毒」はポツリヌス菌、そして⑥「クリスマス・ランニング」では日常のありふれた毒物がキーワードになる。

作者は現役の外科医で、1992年の江戸川乱歩賞受賞者。「炎天のランナー」は受賞後第1作。1994. 6に装丁本で出版され、本書はその文庫本化。



[感想]

先に「嬉しい」と紹介としては原則外のことを書いてしまったが、このような作品はもっとたくさんあっても良いと思う。作者は外科医で、その専門知識を活かしたトリックは興味深い。ランニングも愛好していらっしゃるのだろう、市民マラソンの雰囲気良く出ている。

小説としては、登場人物をどのように配置するかが問題だが、ここではあくまで順位にこだわる政美と楽しく走る菜月の対照がうまい。彼らの参加種目は主に10キロだが、政美は闘志をむき出しにして競い合い、ゴールに飛び込む。一方菜月は10分以上遅くゴールに入ってくるが、走っている間に友達を作ってくる。二人の性格の違いと共に、このような走りかたの違いも出ている、読者にランニングの幅を感じさせる。

またランニング大会も、①は炎暑、②海風の吹く冬、③雨、④は山岳走ということで、ランニング大会がバラエティに富むことを紹介している。

これまで、私としては趣味としてのランニングをいうスタンスで書いてくれる作家を待望していた。本書は、忙しく、しかも複雑な勤務時間帯で働く看護婦という激務をこなしている女性達のランニングである。⑥の最後で、政美はフルを走りたいと思いつつも、フルでは疲れが残って、仕事に支障があるからできないと考える。また菜月には無理だろうから、一人だけ行く分けにはいかないと考える。このような場面に好感を覚える。自分にとって大切なものは何かをしっかりと踏まえているからだ。一見ここには冒険がなさそうだが、看護婦としての彼らには、日々冒険があるのだろうと思う。

一方残念なのは、ランニングの記述が少ないことである。必ずランニング大会から始まり、ランニング大会で終わる話ばかりであるにもかかわらず、ランニング中の描写は300ページ中、合わせて20ページしかない。そしていずれも政美の順位を意識した走りである。短編なので、

どンドン話を進めて事件と推理と捜査と大団円を書き切ってしまうなければならないので、余り描写に字数を使うわけにはいかないのだろう。

一般に日本の大衆小説はストーリーを追うものが多いが、読者の好みのせいもあるだろう。少ないながら、小説の面白さの一つである描写を楽しんでみよう。

「炎のランナー」ならぬ、①「炎天のランナー」は、倒れる寸前の中年ランナーを作者はこう表現している。「顔はもう汗が出尽くしたような感じで、むしろ乾いている。色艶も悪く、暑がっているというよりも、寒さに震えているような感じがした。」と、熱中症の自覚症状を外在化させて伝えている。

④「墜落」では、「両側から突き出る木の枝を払いながら」走るようなコースの果てに、政美は1位をキープしたまま終盤で舗装道路に出て勝利を確信したが、「一瞬我が目を疑った。コースは再び林の中の細い道に入るように設定されているのだった。」と、山岳ランを初めて経験する者ならば、必ず味わうような場面がある。

さて、事故かとも思われる事件を、菜月が旺盛な好奇心で犯罪であることを暴き、政美も引きずり込まれて犯人を突き止めていく、ミステリーの結末は読んでお楽しみ下さい。

(1997. 10. 15)

#### [リバイバル感想]

どうもこの本は新刊では手にはいないようだ。

一般ランナーが主役の珍しい作品であるが、営業的には伸びなかったと思われる。看護婦たちが日常の仕事の合間に楽しむロードレースという設定は、とても良いと思うのだが。

ドラマにも報道にもならないが、一般ランナー、それも遅いランナーの様子は、誰も興味が無いだろうし、大会運営のお荷物で、歓迎されないかもしれない。それでもマラソンを走る権利は誰にもあるし、単に時間で足切りをすれば運営として役割を果たしたと言えるものでも無い。

右は3時間も早く、いわゆるアーリースタートをする生涯マラソン

3傑の姿である。この後、ライトを手に闇の中に消えていった。(この時に大会役員は誰も居ない。) 彼らは協力し合い、励ましあい、生涯のマラソンを楽しんだ。大会のほうでも、アーリースタートを認めて、記録を公認している。そういうフレキシブルな運用が北米では20世紀の最後の方からできていた。この情報は貴重で、その後、日本でも幾つかの大会でアーリーを認めてもらっている。



2002/5/26開催 Berlington Rock&Roll Marathon(カナダ)でアーリースタートをする3傑。

左からNorm Frank(米), Don McNelly(米), Wally Herman(加)

生涯メガラン回数はそれぞれ965回、744回、728回

生年はそれぞれ1931年、1920年、1925年

(2020. 6. 05)